

伊吹はルシファアのエスコートで部屋に入ると、ふらふらとベッドの前にあるソファアに歩いて行った。そして吸い込まれるようにソファアに座ると改めて部屋の内部を見回した。

キングサイズよりもはるかに大きなベッドが目を引くルシファアの部屋は濃い紫と黒を基調とした重厚感あふれる内装だった。天井のシャンデリアと壁のいたるところにつけられたロウソクが常闇の魔界の部屋の内部を常に明るくし、太陽の光なき冷たい空気を暖炉の火が快適な温度にしていた。

「どうした伊吹。俺の部屋が珍しいか？」

伊吹は再び軽く部屋を見回すと小さなため息を吐いた。

「うん。この部屋には数回しか来た事ないような気がするから・・・。」

「そうか。」

ルシファアはクロゼットの扉を開けると中からハンガーを取り出しいつもマントのように肩にかけているコートをかけた。

伊吹はルシファアが服を脱いでいる間ぼんやりとその後姿を見ていた。

いつものコートを脱ぎ赤と黒のベストとシャツだけの姿になると、ルシファアは意外と肩幅がない体である事がよく分かった。

しかし腰にある背中のベルトで体にフィットするようにしたベストの形がただ細いだけではなくルシファアが逆三角形の体である事をしっかりと告げていた。

シュ

パチ・・・パチパチ・・・

結び目を解いたネクタイのシャツとの衣擦れの音と暖炉の中で薪が弾ける音が心地よく伊吹の耳に響く。

屋根裏の賑わいがほとんど聞こえない静かな空間の中、伊吹はソファアにもたれかかると何気なく右を見た。

伊吹の視界には自然と部屋の角にあるガイコツのオブジェのようなものが入った。

「あれが気になるのか？」

ぼんやりとガイコツのオブジェを見ていると、ブラウスとストラックスだけの姿になったルシファアが伊吹の隣に腰を下ろした。

「うん・・・あのガイコツって本当に天井を支えているの？」

「あれはただの飾りだ。天井と柱の間にはめ込んである。」

「そうなんだ・・・。」

「なんだ伊吹、君はずっとあれが柱になっていると思っていたのか？」

「・・・うん・・・。」

伊吹の返事にルシファーは声を上げて笑うと、そっと伊吹の唇に自分の唇を重ねた。

「なかなか可愛い所があるじゃないか。」

伊吹はその時のルシファーの笑顔が今までの中で一番いい笑顔だったような気がした。

「君は服を脱がないのか？」

「・・・え？・・・あ。」

「それとも・・・俺に服を脱がせて欲しいのか？」

ルシファーはそう言うと、伊吹の返事を待つことなく伊吹が着ている私服に手をかけた。

魔界の冷たい空気から身を守るために伊吹が着ている温かなジャケットのボタンを外すと、ルシファーの手はその中に着ていたブラウスのボタンも外し、伊吹の着ている下着をあらわにした。

「・・・淡い水色の総レースか・・・。なかなか可愛らしい趣味をしているな。」

ルシファーはそう言って伊吹の胸の谷間に顔を軽くうずめた。

「普段からこういう下着なのか？」

「・・・うん。」

「男の経験はあるか？」

「・・・一応。」

「そうか。悪魔の男としては俺が初めてだな？」

「うん。」

「ありがとう。」

そういう話をしている間にもルシファーの手は下着だけ残してすると伊吹の服を脱がせ続けた。

その手つきは五千年は確実に生きている悪魔らしく手慣れに手慣れっていて、下着だけの姿になった伊吹のあごを片手で軽く持ち上げ唇を重ねるまでの間は流れるようだった。

そして伊吹の体をお姫様抱っこで持ち上げると、そっとベッドの上に座らせた。

「下着は取らないの？」

「それは楽しみとして取っておく方だ。」

「食事の時は好きなものから食べるのに？ベッドでは逆なんだ。」

ルシファーはいつも着ている黒いブラウスを脱ぎながら伊吹の言葉に小さく嘖き出した。

「食事の時はベールがいるからだ。今ここにあいつはいない。」

「そうだった。」

ルシファーは自身も下着姿になると指を一度鳴らした。

ルシファーが指を鳴らすとベッド周りや暖炉だけ残して部屋中の明かりが全て消えた。

「雰囲気が良い方が良さだろう。なにせこれが最初で最後なんだ・・・。たっぷり楽しませてもらうぞ、伊吹。」

ルシファーはそう言うのと伊吹のブラジャーのホックを片手で外し、やんわりと押し倒しながら伊吹の唇に自分の唇を重ねた。

ルシファーの唇が重なりと伊吹の唇は自然と隙間を開けルシファーを求める気持ちを示した。

ルシファーはその気持ちに応えるように伊吹の唇の上下を柔らかく自身の唇で挟んだ。